

精一杯生きる

甲南中学校 一年 大園 佳昌

僕には大好きな本がある。「永遠のゼロ」という本だ。この本を原作とした、映画やまん画も、僕は何度も見た。その度に、心がしめつけられるような、むなししい気持ちになる。それと同時に、今ある平和な日本に感謝して生きていこうといつも思う。今年は、戦後七十五年目の節目の年であるがコロナウイルスの影響で、毎年全国各地で行われている式典や戦争を考えるイベントなども、中止され、戦争について考える機会が減った。

僕がこの本を好きになったきっかけは、六年前に亡くなった、ひいおじいちゃんの兄弟は、特攻隊について話してくれたことだ。ひいおじいちゃんのおじいちゃん、身長が低く、特攻兵には選ばれなかったそうだ。当時は、その事で馬鹿にされ、自分を責め、くやしい気持ちをおしころして生きていたが、今となっては、特攻隊として死んだ事は、はたして素晴らしい事だったのかと思う。戦争中は、食べ物がなく、みんなやせ細っていた。一日に何度も空襲警報が鳴り、その度に頭巾を被って、近くの防空ごうまで走って逃げていた事をよく覚えているとも話してくれた。ひいおじいちゃんが最後に言った、

「今は本当にいい時代になったよ。戦争中には考えもしなかった便利な物もでき、世の中が豊かになった。でも、これが当たり前だと思ふんじやないよ。便利になったり豊かになった背景には、必ず、ぎせいになった人や想像を絶するほどの努力をした人がいたんだという事を絶対に忘れてはいけないよ。」

と、という言葉が、僕は今でも心に響いている。特攻隊や戦争の事を詳しく知りたくて、以前、知覧特攻平和会館や鹿屋航空基地資料館などに行ったことがあるが、言葉に表せないくらいの衝けきを受け

た。出げき前に、家族へ送った手紙の中に、「日本のために、自らの命をささげられるのは、何よりの喜び」と表現されていて、僕が同じ立場だったら手紙に何と書いただろうか、出げきする前の夜は、何を考えて布団の中に入っていたのだろうか、色々な思いがこみ上げてきた。最も心がゆさぶられた場所は、鹿屋市串良町にある、鹿屋地下ごう第一電信室の跡地だ。ここは、串良基地から飛び立った特攻隊員が、突げきする直前に送るモールス信号を受信していた場所だ。地下ごうはとても狭くて、暗くて、息ぐるしく感じた。当時、この場所ではどんな会話がとびかっていたのだろうか。モールス信号を受信する人達はどんな思いだったのだろうか、考えさせられる場所だった。

日本は昨年、令和と年号が変わり、新しい時代をすすみ始めた。ひいおじいちゃんの時代には、無かった電話は、一人一台以上持つようになるなり、食べ物も豊富になり、外国の食べ物も気軽に手に入るようになった。七十五年前と比べるとまるでタイムスリップしているかのように感じるかもしれない。僕達が社会人になる頃には、またワンステップ便利になっていると思う。

戦争で、日本の為に亡くなった人達の命を無だにしないためにも僕達は、平和な日本を貫き通さないといいけないと思う。今も世界のどこかで、戦争が起こっている。同じ人間なのになぜ殺し合わなければいけないのだろうか、自分の欲のためなら周りはどうでもいいのだろうか。これからの日本を支えていく僕達が、今、何をすべきなのか。それは、過去の戦争の事を知ること、それを、後世へ語りつぐこと、二度と同じあやまちをくり返さないような日本を作ることだと思ふ。永遠のゼロの本の中に、「死ぬのはいつでもできる。生きるために努力をするべきだ。」という言葉がある。僕はこの言葉を胸に、今を精一杯生きていきたい。